The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人物呼称の表記の考察 ： 村上春樹とその翻訳作品を中心に
Author(s)	越野, 優子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 39-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人物呼称の表記の考察

── 村上春樹とその翻訳作品を中心に ──

越野　優子

キーワード：人物表記／漢字／村上春樹／翻訳／中国語

1. はじめに

執筆者は源氏物語および享受作品と翻訳（韓国語訳）の問題を追ってきた。[1] その際考察の中心にしたのは人物呼称であった。例えば、光源氏という呼称は、そこに“光”という言葉（漢字語）が含まれている故に、光が輝くような優れた人物に付けられた呼称であることがこの呼称を見れば分かる。漢字語のもつ表意文字的な性格がこのような理解を容易にする。しかし、漢字語が基礎にあるとはいえ[2] 韓国語（ハングル）となると、“光”を“히카루”（一文字ずつ“ひ・か・る”と記述する）とする翻訳があり、“光”という漢字語とその持つ意味は解体して一つの固有名詞としての扱いになってしまう。[3] このようなことから、漢字語の特性を改めて思い起こすこととなった。

ところで源氏物語と時代は異なるが、同様に諸外国で良く知られている日本の代表的な文学作品として村上春樹の作品がある。周知のように村上の作品はフランツ・カフカ賞（2006年）エルサレム賞（2009年）を受賞したこともあり、欧米諸国に普くその名を知らしめたのであるが、世界に出る契機となったのは同じアジア圏からであり、その最初は台湾の台北の雑誌『新書月刊』1985年8月号における、翻訳者・賴明珠による「村上春樹的世界、選訳小特集」であったとされる（藤井（2007））。そして台湾で1989年3月『挪

威的森林』（ノルウェイの森）として故郷出版社から出版されたのが、村上小説が翻訳として世界に出た最初とされる（この台湾版は前出の賴明珠ではなく、別の翻訳グループの共訳）。同年7月、林少华訳の『挪威的森林』が中国桂林・漓江出版社から出版された。

村上春樹のアジア圏における受容の考察は様々な側面から行うことが可能であろうが、一連の考察に引き続き本稿は、観点を村上春樹の作品とそれが翻訳された時の、人物呼称（作品の主役級の人物呼称）とその表記を中心に考察する。人物呼称とは物語の題名の次に読者に強くアピールする固有名詞と考えられ、また村上春樹は後述するが執筆の際人物呼称に独特の視座をもっており、それが翻訳されたときにどのような姿になるか、このような観点からの考察は有効であると考えられるからである。

執筆者の翻訳作品への考え方は、一貫しておりこれを最初に記す。それは、まず文学作品の“原本・原典・原作”に対し、その影響を受けて以後つくられた“作品”が存在し、この“作品”は全く別の新しい価値を持つ創造物であるという見解である。具体的に順に記すと、それは印刷文化以前の古典作品の“原本”（源氏物語における現存しない紫式部自筆本）と多くの“写本”（青表紙本系統、河内本系統、それ以外の別本と分けられてきた）の関係に言い換えられ（越野（2007））、また、“原典”（源氏物語）と“享受”（謡曲の『須磨源氏』、漫画の『あさきゆめみし』等、様々な後続）（越野（2013a）、（2013b））、そして“原作”（源氏物語の日本語版）と“翻訳”（韓国語訳等各国翻訳）という関係に置き換えられる（越野（2009）、（2013a）、（2013b））。執筆者はこれらをそれぞれ別個の価値を持つ創造物とみなす。このような考え方を基に、作品を村上春樹に移して“原作”と“翻訳”を考察する。

2. 村上春樹の人物表記の特徴 ——村上の考え方と作品の実際

まず、村上春樹の出世作として内外に名高い『ノルウェイの森』の翻訳

状況から記す。この作品は、日本では1987年に出版された。1989年に翻訳版が出版された中国では、1996年改訂新版から爆発的な売れ行きを見せたとされる（藤井（2007））。その『ノルウェイの森』の日本語原作では、主な登場人物の名前が“ワタナベ　トオル”“直子”“キズキ”“ミドリ”“レイコさん”と、“直子”以外はカタカナ表記される。“ミドリ”のように後から“緑”と戸籍上表記が分かる人物もあるが、“ワタナベ”と“キズキ”に関して漢字表記は不明のままである。

日本の命名は、法律では戸籍法の第60条にあるように、常用漢字及び人名漢字が使用可能で、また平仮名・片仮名を用いても構わないので、“トオル”も“キズキ”も人名である限り、小説の世界を離れた一般論としても問題はないし、更に小説という虚構世界という視座を持ち込めば、虚構は無限であるから一層問題はない。ただ通常“ワタナベ”は、“渡辺”、“渡邉”、“渡部”等の漢字が多く当てられる氏である。これが片仮名表記であるのは、近代に入って外国人の増加に伴い外来苗字が増えたとはいえ、“ワタナベ”が外国人という設定は小説から伺えない以上、通常とは異なるという印象を読者に与えるであろう。

これについては村上自身が、アメリカ人インタビュアー（ジョナサン・エリス）の質問に対して、自分の名前を例にとって、次のように述べている。これを読むと、村上春樹は、人物表記に無頓着ではないこと、自作品における人物名のカタカナ表記への明確な意図があることがうかがえる（村上春樹（2010））。

> たとえば自分の名前について言えば、「むら」は村を意味します。「かみ」は上手を意味します。「はる」は春、「き」は樹木です。そのように漢字はひとつひとつ意味があります。それが一つになれば総合的なイメージが生まれます。僕はできるだけそういう意味性を取り払いたかった。カタカナで名前を付ければ、その名前はより匿名性を獲得することになります。シンボルや、記号に近いものになります。

つまり本来漢字の名前を敢えてカタカナに変換した村上であるが、これが翻訳されるとなると、漢字圏の国々では基本的には漢字で表すのが原則であるから（しかし翻訳者によっては異なることは後述する）、漢字→カタカナと意図的に表記された名前が、翻訳の段階でカタカナ→漢字と逆になってしまう。この翻訳での逆現象について、村上は更にこう述べる。

> 『ノルウェイの森』に主人公の友人であるキズキという人物が登場します。でもその名前はカタカナで書いてあって、漢字は示唆されていません。中国の翻訳者は困って、僕に質問してきました。これはいったいどのような漢字で書かれるのかと。中国語には漢字しかありませんから。でもどんな漢字を書けばいいのか、僕には見当もつかない。「どうとでも好きな漢字を使って下さい」としか答えようがありませんよね（笑）。

ここでは村上は一見人物表記への無頓着な見解を示しているともとれるが、どのような漢字表記であろうと一旦漢字を当てたら意味が生まれるのであれば、それが避けられない以上、いっそこだわらないという姿勢を示したと考えていいであろう。

これについて漢字圏の翻訳者たちであるが、林少华（中国）、葉蕙（香港）は“キズキ”に“木月”を当て、賴明珠（台湾）は“Kizuki”にしている[4)]

翻訳者たちの苦心と工夫は最新作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013年4月刊行）でも発揮された。後述するが最新作では、主人公多崎つくるは平仮名表記で記されているが、『ノルウェイの森』の“ミドリ”が実際は“緑”であるように、この“つくる”も実際は異なることが作品に次のように記されている（村上春樹（2013））。

> 本名は「多崎作」だが、それが公式な文書でない限り、普段は「多崎

つくる」と書いたし、友だちも彼の名は平仮名の「つくる」だと思っていた。

主人公のこの名を付けたのは父親の“多崎利男”で、“つくる”にどの漢字を当てるか、具体的には“創”にするか“作”にするかで悩んだことが、死後、母親によって知らされる。母はつくるに向かって「『創』みたいな名前を与えられると、人生の荷がいささか重くなるんじゃないか」という故人の危惧を伝え、「『作』の方が同じつくるでも、本人は気楽でいいだろうって」と述べている。“つくる”はそうして名づけられた名前に対して、

それでも父親のその見解に賛同しないわけにはいかなかった。「多崎創」よりは「多崎作」の方が間違いなく自分の名前として相応(ふさわ)しい。独創的な要素なんて、自分の中にはほぼ見当たらないのだから。しかしそのおかげで「人生の荷」がいくらかでも軽くなったかというと、それはつくるには判断しかねるところだった。

最新作は冒頭から死の言葉で語られ（「大学二年生の七月から、翌年の一月にかけて、多崎(たざき)つくるはほとんど死ぬことだけを考えて生きていた」）ており、以後苦悩の経過と原因が徐々に明かされる形をとり、“つくる”のこの見解はそれに沿っている。そして作品の地の文の形でこの作品における人と名前への関係と見解が以下のように記されている（村上（2013））。

いずれにせよ、そのようにして彼は、「たざき・つくる」という一個の人格になった。（中略）まず名前が与えられた。そのあとに意識と記憶が生まれ、次いで自我が形成された。名前がすべての出発点だった。（傍線執筆者）

この引用部分最後、名前を人間の出発点とする見解は、村上のこの最新作が

名前に強い思い入れがある形で執筆されたことを窺わせる。その上でこの作品ではあえて平仮名を通称的な扱いで使用していることを記しており、父親の配慮で少しは人生を楽に生きられるようにと付けられた“作”という漢字すら、普段は使わない形で過ごしている“つくる”という主人公の生き方を、名前という側面から表現しているともいえる。

ところで最新作でのこれら一連の描写であるが、これは翻訳不可能ではないかという意見が出ている。[5] 漢字と平仮名の併用無くして、一連の翻訳は難しいのではないかという意見である。[6] 村上自身の原作そのものが、漢字と平仮名を行き来する中に主人公“つくる”の生き方を描いている部分がある以上、この辺りの記述の翻訳は、作品の主眼に関わることであり非常に重要な部分であろう。前述の『ノルウェイの森』の翻訳に対する村上の見解をここで振り返るならば、村上は自身の作品の人物の片仮名表記には、“匿名性の獲得”という明快な目的があった。『ノルウェイの森』に対する見解を最新作に完全にあてはめられるかという問題点は残るものの、村上の登場人物の名前への拘りは依然として見て取れる。となると村上の原作が翻訳される際に、どのように平仮名−漢字の関係を訳出されるかは、作品の根幹に関わることである。しかしこれも『ノルウェイの森』での村上の発言に戻れば、村上は自身の翻訳作品の漢字表記には頓着しない姿勢であった。少なくともインタビューとして記録が残る中から見える彼の見解は、翻訳作品を別個の創造物としてみなす方向でなければ、生まれ得ないものと考えられる。もし“原作”が全てという考え方であるならば、“翻訳”の漢字表記を翻訳者に委ねる発言は行わないと考えられるからである。[7] このことを更に次章では、こうした人物表記の問題がよく表れていると思われる村上の短篇集『東京奇譚集』を材料に考察する。

3. 『東京奇譚集』の名前・人物表記・翻訳

『東京奇譚集』は2005年刊行の短篇集である。それぞれ5つの作品は独立

しており、また村上自身のこの作品の制作過程への言及した（村上（2010））インタビュアー古川日出男に対し、「『東京奇譚集』もいわゆる都市奇譚というか、そういうものを緩い縛りにして、あとはある程度自由に書いていこうと思って」「三人称、違う主人公、いろんなシチュエーション……。」そして注記の形で「※話したあとで思い出したんだけど、『東京奇譚集』はいくつかのキーワードをざあっと紙に書き並べて、そこから三つずつ選んで、それをもとにひとつの短編を書くという作業をやっていたと思います」と述べている。だから主人公も内容も違う話が並べられているが、津久井伸子が「本短編集には一貫して、「奇譚」であることはともかくとして、他者との関係性、特に家族の関係性が語られていると考える」と述べるように、[8] それぞれがキーワードで連関しあっている。そして単に連関する短篇を無造作に並べただけではないことは、最初の短編『偶然の旅人』の冒頭が「僕＝村上はこの文章の筆者である。この物語はおおむね三人称で語られるのだが、語り手が冒頭に顔を見せることになった。昔風の芝居みたいに、カーテンの前に立って前口上を済ませ、お辞儀をして引き下がる。わずかな時間のことなので、我慢しておつきあいいただければと思う」から開始していることからも明確である。『偶然の旅人』は必ず冒頭に置かれるべくして置かれたということである。このあと『ハナレイ・ベイ』『どこであれそれが見つかりそうな場所で』『日々移動する腎臓のかたちをした石』『品川猿』まで続く。最後の『品川猿』には作者は顔を出していない。

この村上春樹の原作に対し、中国版『东京奇谭集』（林少华訳　上海译文出版社　2006）を原作と翻訳を対照させながら以下考察する。短編名は《偶然的旅人》、《哈纳莱伊湾》、《在所有可能找见的场所》、《天天移动的肾形石》《品川猴》それぞれと表記されている。

『偶然の旅人』は三人称である彼の物語である。原作は「彼はピアノの調律師をしている。住まいは東京の西、多摩川の近くにある。41歳でゲイである」と記し、これが林少华の翻訳『偶然的旅人』では「他是…」「住在东京西面…」「四十一岁，同性恋者」と記されている。“ゲイ”という言葉が翻

訳では漢字表記されているが、林少华の翻訳は、全てを漢字（中国語）で表そうとはしていない。それは例えば『偶然の旅人』原作の「レガッタ・バー」は翻訳では“REGATTA BAR”、「シングル・トーン」は”単音（single tone)”「『フランス組曲』とか『パストラル』」は“《法国组曲》和《牧歌》”と訳されているところから分かる。中国語（漢字）英語等、林少华は原作から離れて任意に表記を選択しているということになる。このような翻訳態度は『偶然の旅人』の次の作品『ハナレイ・ベイ』でどのように表れているかを、みたい。『ハナレイ・ベイ』は、主人公の表記の問題と作品内部と密接に絡むと思われる作品だからである。

『ハナレイ・ベイ』は『東京奇譚集』の第二の短編である。冒頭は「サチの息子は十九歳のときに、ハナレイ湾（ベイ）で大きな鮫に襲われて死んだ」で開始する。翻訳は「幸的儿子十九岁时……死了」と記されている。この『ハナレイ・ベイ』は“サチ”が主人公であり、息子を不慮の事故で失った絶望から再生する物語であるので、この“サチ”の表記は軽視できない。ここで『ノルウェイの森』の“キズキ”について振り返ると、藤井（2007）は「「キズキ」からは心の「傷」あるいはそのトラウマに「気付く」という言葉が連想されるいっぽうで、その名前の不思議さから極めて特異な人物であるという印象も受けるであろう」としているが、“サチ”は“幸”という比較的知られた人名があり、その点で“気付き”という動詞連用形の人名は無い『ノルウェイの森』よりこの名前の意味するところとそれが作品全体に及ぼす作用が容易に考えうる。息子を不慮の事故で失った不幸な女性が不幸から立ち直る物語と、ありきたりの解釈がすぐに成立する故に、あえて村上は“幸”ではなく“サチ”にしてそのありきたりさからずらしていると考えられる。しかし翻訳作品では“幸”になっているので、この解釈の回路は随分わかりやすくなっているとすべきであろう。ちなみに、台湾の頼明珠の『東京奇譚集』の『哈那雷灣』では「Sachi的兒子十九歲的時候…（中略）…被大鯊魚攻擊而死悼」として訳されており、これは前出の『ノルウェイの森』の“キズキ”を“Kizuki”とした訳し方と同様である。

この『ハナレイ・ベイ』の原作に戻ると、この物語では“サチ”と死んだ息子、日本人サーファー二人組などが登場するが、名前が判明するのは“サチ”と息子だけである。しかしその“サチ”も本当の正確な表記は分からない。“サチ”も“幸”も“佐知”も可能である。そして息子であるが、おそらく“タカシ”だと分かるがそれも明確に記されてはいない。息子が泊まっていたホテルで「髪の長い半裸の白人二人」に“サチ”は息子の情報を問う場面がある。

「このホテルに泊まっていた私の息子が、三日前に鮫に襲われて死んだの」とサチは説明した。
二人は顔を見合わせた。「それ、テカシのことかい？」
「そう、テカシのこと」とサチは言った

原作で“テカシ”としか記されていないが、読者は作品外の一般的な知識から“タカシ”であろうと見当がつけられる。“テカシ”という名前が一般的ではなく、「髪の長い半裸の若い白人」にとって恐らく耳で聞いただけの日本人名は不正確に聞こえただろうという推測から、“タカシ”だと考えられるのである。そしてこの原作で、この後“タカシ”は“サチ”にとって「息子」としか記されない。原作において、“サチ”の名前について村上はカタカナにし匿名性を保持しながらも“幸”を象徴的に込めるなど工夫をしているが、息子には対照的に全く記号そのものの扱いをしている。林少华の翻訳作品では白人と“サチ”の問答は以下のようである。

两人对视了一下。“那，可是TEKASHI?”
是的，是TEKASHI“

林少华はここでは漢字を当てず、音のままに表記している。
村上は名前を重要視しないときは、この“タカシ”のような扱いをしてい

る。重要視はしない。しかし全く記述しないかというとそういうわけではないという表し方である。『ハナレイ・ベイ』の次の短編『どこであれそれが見つかりそうな場所で』を見てみる。

『どこであれそれが見つかりそうな場所で』（以後、『どこであれ』と略称する）と前作『ハナレイ・ベイ』は共通点がある。『ハナレイ・ベイ』は鮫に食われて死んだ息子の話の話で幕を開け、結末は「ハナレイ・ベイ」という題名で締めくくっており、『どこであれ』は事故死した義父の話で始まる。結末はやはり「どこであれそれが見つかりそうな場所で」と題名で終わる。女が私に失踪人の捜索依頼をする。失踪人は女の夫で、26階のマンションから24階に住む母親に会いに階段を使って行き、戻ってくる途中で失踪したという奇妙な事件を基にした奇譚である。女、女の夫、義母、私が登場するが、この女と夫の家族の姓が「胡桃沢」であることが、私が捜索の過程でマンションの住人とおぼしき人々に尋ねる際に偶然分かる。

「26階に住んでおられる胡桃沢さんのことを、ひょっとしてご存じでいらっしゃいますでしょうか？」
「クルミザワさん？」

この名前には、何か象徴的な意味を探すことは難しい。記号として登場しているだけと考えて差し支えないと思われる。この名前は私が夫を捜索する際に、マンションの住人に必要に応じて問う際に使用されるだけの存在である。ところで初出は「胡桃沢」と男の問いで記され、問われた住人側が「クルミザワさん？」と返答した際に片仮名で記したのは、咄嗟に聞かれたときに、同じマンションの特定の人物を想起せず、記号のように思い浮かべたからであろう。林少华の翻訳では、原作の漢字の“胡桃沢”また、一か所だけ登場する問われた住人が発した片仮名の「クルミザワさん？」も全て“胡桃泽先生”で統一している。

4番目の短編は『日々移動する腎臓のかたちをした石』（以後『日々移動

する』と略称する）で、最初の恋愛の失敗と父親の言葉の呪縛で二度目の恋愛ができないでいる主人公“淳平”が三十一歳のとき、「高い建物と建物のあいだにロープを張って、その上を歩いて渡る」“キリエ”という女性との出会いと別れによって、自信を取り戻し生きていく話に、小説内小説の完成が絡む内容である。“キリエ”という片仮名の名前についてこのような記述がある。

彼女は名前を名乗った。キリエといった。
「なんだかミサ曲の一部みたいだ」と淳平は言った。

津久井（2007）はこの“キリエ”に対して、「そうした状況での「キリエ」との出会いは、「淳平」にとって閉塞状況を打ち破る契機をもたらした（「キリエ」が「主よ」という祈りの意味をもつ言葉であることは暗示的である）。」と述べている。ラテン語Kyrieの暗喩というよりは、前出“淳平”自身が「ミサ曲の一部」と述べる記述があるように明確な象徴的名称であるとみていいであろう。“キリエ”が名前を名乗る部分の林少华の翻訳は「她报出了自己的姓名；贵理惠。“有点像弥撒曲的一节” 淳平说。」で漢字をあてて終始している。

最後の短編『品川猿』は最も奇譚的であると言える。自分の名前を思い出せなくなった主人公“みずき”の苦悩で物語は始まり、学生時代の寮生活での名札と後輩の死の問題などを経て、名前喪失の理由が、名前を盗み、人の言葉を話す非現実的な猿という存在にあることが判明し、この猿と主人公“みずき”との対峙から“みずき”が自らの心の暗闇と向かい合う勇気を持ち生きていく決意をもつという経過を経る内容である。本稿で考察してきた人物呼称－名前に関しては、“みずき”（現；安藤みずき、旧姓；大沢みずき）は特異な表記ではないけれども、この短編が名前の問題で終始一貫している点では、作者村上の名前への並々ならぬ拘りを感じさせる。この名前に関する記述を記す。

> 彼女の名前は「安藤みずき」だった。結婚前の名前は「大沢みずき」。どちらもとくに独創的な名前とも言えないし、ドラマティックな名前とも言えない。（中略）彼女が「安藤みずき」になったのは、三年前の春のことだ。彼女は「安藤隆史」という名前の男性と結婚して、その結果、安藤みずきと名乗るようになった。最初のうちは安藤みずきという名前にうまく馴染めなかった。字面も音の響きも、いささか落ち着きが悪いように感じられた。しかし何度も口にし、繰り返し署名をしているうちに、安藤みずきもそれほど悪くないなと、だんだん思えるようになってきた。たとえば「水木みずき」とか「三木みずき」とか、そういう語呂合わせのような名前を名乗らなくてはならない状況だって起こり得たのだから（後略）、

“みずき”の名前は『ハナレイ・ベイ』の“サチ（幸）”のような意味は無い。『日々移動する』の“キリエ（Kyrie）”でもない。極めて平凡で、そしてその名が象徴するように彼女の人生は平凡で可もなく不可も無くだった。しかしそこに恐ろしい暗黒の認めたくない人生の真実があったという逆説的内容である。“みずき”は林少华の翻訳では「瑞纪」と漢字表記され（賴明珠訳では「美月」）、またこの「語呂合わせ」の部分は欄外に注が付され、「①在日语中，”水木“、”三木“的发音同”瑞纪“的发音相同或相近。」（執筆者訳：本文の「水木」「三木」は「瑞紀」と同じ音か似ている音の言葉である）と記されている。訓読みの感覚を読者に伝えるため説明を補助した場面である（賴明珠訳では訳本全体に訳注は無い）。

4. 終わりに

以上本稿では、人物表記の考察を村上春樹の作品で行った。その際、村上が主要登場人物の人物表記に独特の工夫をしていることに着目し、それが作

品に小さくない意味をもつことを考えてきた。そして人物表記にそうした工夫がされている作品が、翻訳特に漢字圏の国でどのような表記となりそれがどういう意味をもつかを考察した。一般に表記とは作品の表面的な部分と思われがちであるが、記された結果が作品である以上、表記も看過できない観点と考えられる。しかも村上は、人物表記に意識的な作家であり、考察の意味はあると考えられる。本稿では紙幅の都合から中国語（簡体字）の翻訳を中心に考察したが、次は中国語（繁体字）との両中国語の対比を課題としたい。

［注］

1） 一連の拙稿は越野（2013a、2013b、2009）である。なお執筆者が韓国語訳の考察をしたのは韓国での勤務（2009年9月～2012年8月）が契機となっている。韓国では村上春樹の『ノルウェイの森』（2011年9月～12月）、短編集『レキシントンの幽霊』（2012年3月～6月）を「일본문학세미나（日本文学セミナ）という授業で扱った。その後、中国にて2013年2月下旬～6月中旬まで短編集『東京奇譚集』を「日本文学名著阅读（閲読）」という授業で扱った。なお、朝鮮半島の言語は総称として朝鮮語（あるいはハングル）もあると考えられるが、韓国語という言葉で本稿では取り扱う。

2） 韓国語と漢字（漢字語）との関係については『한국민족문화대백과사전（韓国民族文化大百科事典）　全28巻』がある。

3） もちろん韓国語の翻訳も一様ではなく、輝く君を“빛나는님”と、意味を韓国語で訳して表している翻訳もある。越野（2013b）参照

4） 藤井（2007）同書の第5章第2節の題名が”「審美的」な林少華訳、「お化粧なし」の賴明珠訳“とあるように、賴明珠の訳は村上のありのままの意図に、より沿おうとする翻訳姿勢だと考えられる。

5） 2013年5月5日　2013年度第2屆村上春樹國際學術研討會（於　台湾淡江大學）での小森陽一氏の基調講演での発言より

6） 同国際學術研討會の午後のシンポジウムで、そもそも“つくる”という平仮名表記で記される主人公を、漢字圏の国々でどのように翻訳するかという問題が出た。これに対し中国の林少华は中国でよく流通している漢字を当てたい旨を述べ、台湾の賴明珠は作品に“作”とあるからそのままそれを当てるという旨を述べた。但し中国の最初の翻訳は林少华ではなく施小炜に拠るもので、南海出版公司から2013年10月に発行されている。台湾は賴明珠に拠り、時報文化出版企業股份有限公司から2013年09月

に発行されている。中国・台湾とも“多崎作”としている。中国版では、つくるの命名の由来の場面で“つくる”“たざき・つくる”をブロック体の活字にして目立たせている。台湾版は現時点では未見である。

7）　先の国際学術会議での林少华と賴明珠の“つくる”の漢字表記への自由な発言は重要である。両翻訳者とも村上とは面識があり、その上で最新作の翻訳を見据えた発言がこのように見解が分かれるということは、村上に“つくる”の漢字表記をある程度自由に任せられることが予想される、あるいはそのような言質を村上から得ている可能性が無ければあり得ない。

8）　津久井伸子（2007）「村上春樹『東京奇譚集』―家族という呪縛―」（宇大国語論究18）

［参考文献］

越野優子（2013a）「源氏物語の享受作品“あさきゆめみし”の日韓比較―王権・呼称・待遇表現を中心として」（『詞林』53号　2013年4月）

越野優子（2013b）「源氏物語の享受作品の呼称について―”須磨源氏”を中心に―」（『日語日文学研究』84輯　韓国ソウル　2013年2月）

越野優子（2009）「「國冬本源氏物語」とその韓国語譯について」（『日語日文学研究』69輯2巻）

越野優子（2007）『国冬本源氏物語の研究』（博士学位論文　未刊行）

藤井省三（2007）『村上春樹のなかの中国』（朝日新聞社）

村上春樹（2010）『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集1997-2011』（文芸春秋）

村上春樹（2013）『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文芸春秋）

村上春树（2013）『没有色彩的多崎和他的巡礼之年』（施小炜訳　南海出版公司）

村上春樹（2005）『東京奇譚集』（新潮社）

村上春树（2006）『东京奇谭集』（林少华訳　上海译文出版社）

村上春樹（2006）『東京奇譚集』（賴明珠訳　時報文化出版）

淡江大學日本語文學系・村上春樹研究室（2013）『2013年度第2屆村上春樹國際學術研討會　国際會議手冊（2013.5.5 台湾での国際学術会議の予稿集）

（本学大学院博士後期課程修了／福州大学外国語学部日本語科専任教員）

SUMMARY

村上春树及其翻译作品中人物名称表记的考察

越野优子

键字：人物表记 / 汉字 / 村上春树 / 翻译 / 中文

笔者围绕了人物称呼探讨了源氏物语及其享受作品和翻译（韩译）的诸个问题。村上春树作品虽然和《源氏物语》时代不同，但是同为外国熟知的日本代表性的文学作品，且笔者在汉字圈的韩国和中国的教学课上教授过村上春树作品，因此以村上春树为研究对象。人物称呼作为固有名词，给读者强烈印象，仅次于故事题名。而且，在先行研究中已知村上春树作品里，人物称呼的标记富有特色。因此，本论文围绕村上春树作品及其翻译时人物称呼（作品主人公）的表记，做了一系列的考察。翻译使用了汉语版。第1章说明了笔者对人物表记的研究过程和研究方法。第2章以《挪威的森林》（KIZUKI）为例，考察了村上春树的发言和翻译者的发言。第3章作为主要章节，论述了被认可从人物称呼考察具有有效性的村上春树短篇作品《东京奇谭集》的第5篇（主要是围绕《哈纳莱伊湾》）。第4章在总结的同时，考察论述了今后从人物表记研究村上春树作品的有效性。